

連載



Primetals Technologies Japan(株)

池本 裕二

【経歴・資格】

技術士(機械・金属・経営工学・総合技術監理)

日本技術士会 中国本部

機械/船舶・海洋/航空・宇宙部会 副部会長

日本塑性加工学会 中国・四国地区代議員

会社では、技術講座の講師を担当して、若手技術者の設計力向上に力を入れている。



Vol.19

生成AIの使い方 弁護士業務の適用事例に学ぶ

キーワード 生成AI、弁護士ドットコム、自然言語処理、暗黙知、形式知

●当連載について【広島県中小企業団体中央会】×【日本技術士会中国本部】

急激な社会変化への対応が求められている中小企業に、より適切な支援が実施出来るように、広島県中央会では日本技術士会の中国本部と連携し、技術的側面の支援体制を強化しました。

組合内あるいは企業内に、自社単独で解決困難な技術的課題がある場合は、連携支援部にご相談下さい。(TEL 082-228-0926)

はじめに

2023年6月8日に政府の科学技術戦略がまとめられました。その戦略の中で、文書や画像を自動的に作り出す「生成AI」の利活用を、可能性とリスクのバランスを考慮しながら強化していくことになりました。<sup>1) 2)</sup> さらに東京商工会議所が7月28日に「中小企業のための『生成AI』活用入門ガイド」を公開し、「生成AI」の基本概念・機能、使用方法を中小企業の経営者・従業員に向け、入門編として紹介されました。<sup>3)</sup> そこで、注目されている「生成AI」の理解を深めるためにその利用が進んでいる弁護士業界の「生成AI」の活用事例を基に解説します。

まず、弁護士業界の「生成AI」の利用状況について、弁護士ドットコムが調査した結果を図1に示します<sup>4)</sup>。結果から弁護士の約3割が「生成AI」をすでに利用しており、7割を超える弁護士が業務にAI導入を期待していることが分ります。本誌では、「生成AI」を解説するとともに弁護士業界での業務効率化を目的とした「生成AI」の活用方法や留意点を紹介します。

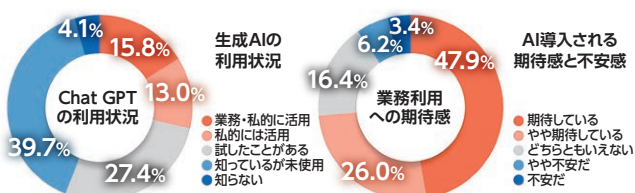


図1 調査結果

生成AIとは

生成AI(または生成系AI)とは、「Generative AI: ジェネレーティブAI」とも呼ばれ、文章・画像・プログラム等、様々なデジタルコンテンツを生成できるAIのことを示します。従来の検索エンジンの限界を超え、ユーザーとの深い対話を通じて情報を提供することができます。言い換えれば、情報の洪水の中から対象との関連性の高い情報を見極め、提供する能力を持っています。そして、自然言語処理の技術を駆使して、ユーザーとのコミュニケーションもスムーズに行うことができます。それは、今後激しくなる情報の過多の中で、判断がますます困難な状況になる、かつ、ストレスを生む環境から解放してくれると期待されています。

生成AIの活用方法 弁護士会の活用事例

弁護士の業務の流れを図2に示します。図は、あくまで一例であり、事件によって様々な経過を辿ることがありますが、基本的には①相談→②契約→③事務処理→④終結と進んでいきます。図には、生成AIによって補助される業務も併記しています。

①相談時の活用

莫大な相談内容を法的に対象となるものとそうでないものを選別する際、AIが適合事案を蓄積したデータベー

スから抽出し提示することで対象である判断の精度を高めています。

## ②契約時の活用

対象となった相談内容に合わせた契約文書の作成までも生成AIが、ほぼ完成に近い文書の状態で出力するので、弁護士は確認作業に徹することができ、業務の効率化と品質の向上に貢献しています。

## ③裁判・弁護時の活用

裁判手続きのための法律文書作成や判例データベースからの資料検索作業の補助に使われています。弁護士の作業の中で、資料を「整理する」「探す」といった単純作業も少なくありません。

一方、AIの得意なこととして単純労働や大量の情報を速いスピードで正確に処理することなどがあります。その特徴をもつAIが単純作業を担い、弁護士は専門性のある業務に集中することにより生産性を向上することができます。加えて、法律事務所には高度に標準化されたテンプレートや判例集が大量にあり、これらをAIによる文書生成の土台にできるため、一般的なテキスト生成よりも標準化されているAIの法律文書・テキストの出力の方がはるかに自動生成しやすい環境が整っていたことも生成AIの活用を促進させました。

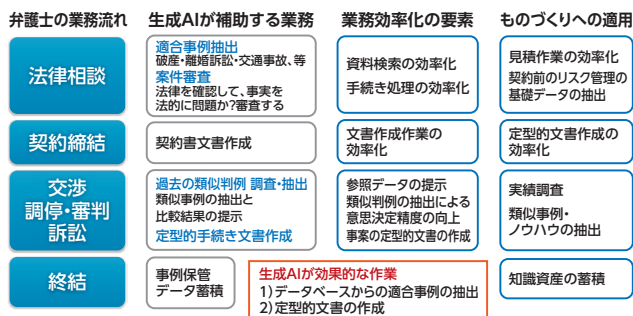


図2 業務の流れと生成AIが補助する業務

特に資料の検索作業の補助にも生成AIは効果を発揮しています。例えば、契約書のチェックや、不利な条項を一目で確認すること、膨大な資料やメールから訴訟のための証拠を探すことなどの資料検索作業になります。具体的な生成AIの資料検索の活用は、「膨大な知識データベースの中から依頼人の相談内容と判例が、どの程度似ているか? AIが判断して、関連のある判例として選定し、弁護士の『問い』に合わせて提示する。」という特徴があります。これは共通点を見つけることが得意なAIの特性を生かし、その共通性から高い関係性を生成するAIであるが故、可能となった補助業務となります。

以上のことから、生成AIは、弁護士の活動を迅速化してくれる頼れるパートナーと捉えられています。

## ■生成AI活用における留意点

生成AIを使用する際には以下の2点を留意することが必要です。

### ①最終確認は、現時点ではヒトの役割

生成AIは時折突拍子もない回答を提案します。大量のデータの中には妥当性やバランスに欠ける情報や差別的な思想が含まれる可能性もあります。そのため、成果物として採用するには「最終確認は、現時点では人間の役割」という考え方が重要となります。最後は人間が確認や判断を行うことで、AIの回答の妥当性や品質を確保することが重要となります。

### ②「常にAIの成果物は進化している」というスタンスを持つ

生成AIを使い続けるための2つ目のポイントは、常に「前回の成果物との違いを問う」スタンスを持つことが必要となります。具体的に学習データの蓄積やアルゴリズムの更新、つまり、テクノロジーは常に進歩しており、新たなツールやプラットフォームが登場します。それらに影響される生成AIも進化を続けており、新しい機能やアルゴリズムが開発されています。そのため、新しい機能やアルゴリズムに変化しているとのスタンスを持つことで、より高度に生成AIを使いこなすことができます。

## ■最後に

中小企業の皆様においても、契約文書の作成や知識情報の整理、品質管理等、地道な作業が多くあると推測しています。例えば、製造技術や作業ノウハウ等の知識情報の蓄積は、自社の強みを強化する地道な作業であります。現在も、知恵・ノウハウは対象・状況に合わせて、熟練者にて表現・解釈を変えて、活用されていると考えています。

しかしながら、熟練者以外では、精通する知識を暗黙知から形式知へ変換することが困難であるが故に自社の知識(ナレッジ)を十分に生かしていないと思われる技術者も少なくないと考えています。支障になっている形式知(言語)に交換する作業は、生成AIが淘汰してくれます。具体的には、生成AIが自社で蓄積されたノウハウ・知識情報から対象の状況に合わせて、掛けられた適切な「問い」によってアイデアを生成してくれます。そのアイデアを基に問題解決を図れる時代が近く現れると考えています。

つまり、自社の強みとなる知識情報を活用する仕組みができあがります。そのためには、生成AIを使ってみるのが大切だと思います。まずは、簡単な文書作業をAIに任せると、弁護士のように生産性の向上を図っていきましょう。

参考文献:

- 1) 統合イノベーション戦略推進会議(第16回)  
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tougosenryaku/16kai/16kai.html>
- 2) 生成AI時代の人材育成  
[https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/digital\\_jinzai/pdf/008\\_05\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/digital_jinzai/pdf/008_05_00.pdf)
- 3) 「中小企業のための「生成AI」活用入門ガイド」  
<https://www.tokyo-cci.or.jp/file.jsp?id=1200434>
- 4) <https://dime.jp/genre/1588882/>